

平成27年1月13日(火)

老球の細道102号

人間関係の極意とは

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

プロ野球『楽天』の監督だった星野仙一氏は優勝と最下位という天国と地獄を味わった。阪神の監督時代から“闘将”というキャラクターで一世を風靡した監督だったが、自分の体調のみならず、スーパースター田中投手不在であればやむなしと言わざるを得ない。選手あつての監督なのがプロスポーツの世界なのだろうか。

星野氏が監督を務めた2008年の北京五輪野球競技において全日本チーム『星野ジャパン』は話題性とは裏腹に、むなしくもメダル無しの4位に終わってしまったことは記憶に新しい。この時にマスコミが指摘していた敗因は、コーチングスタッフを自分のお友達で固め、イエスマンばかりになってしまったということであった。そのために、コーチングスタッフ誰からも指導の欠点を指摘されることなく、適切な状況判断もできず、作戦、選手起用にミスが出たのではないかと揶揄された。

チームを上手にまとめ上げ一つの目標に向かって力を合わせるためには、スポーツ集団のみならずチーム内の人間関係を巧みにさばっていくことが必須である。チームは自分の気に入る人ばかりではない。気にいらぬ人、考えが違ふ人など玉石混淆が基本である。どこかの学校の修学旅行の班編制のように「好きな人だけで」なんていうのはありえない。たとえ最初は好きであっても、時間とともにその関係に軋轢ができたり、嫌いになってしまったりするのは世の男女関係、職業選択などにおいても枚挙にいとまがない。

生まれも育ちも、親も違ふ。考えも、体つきも違ふ。違ふづくしのメンバー達がチームを作つて、良好な人間関係とチームワークを築いていくにはどうしたら良いのだろうか。100年以上昔に書かれた佐藤一斎『言志四録三』(言志晩録)の中に現代に十分通じる金言が記されている。

「自分が他人を視て修養する場合。いつでも人を視るには、その人の優れている所を視て、欠点を視ない方がよい。短所を視れば、自分が彼に勝つているので、おごりの心が生じ、自分の修養に利する所がない。人の長所を視れば、彼が自分に優つていることがわかり、これに刺激され励まされ、自分を磨くことに有益である」

これとは反対に、他人が自分をどう見ているかを知つて修養する場合もある。こちらは佐久間象山『省(せい)けん録』に記されているものである。『省けん録』とは自分のあやまちを省みる記録という意味であり、象山が憂憤の情をいだいて書いたものである。原文のまま記す。

「人、己(おのれ)を誉(ほ)むるとも、己に何をか加えん。若し誉れによつて、自ら怠らば、即ち返つて損す。人、己をそしる(悪く言われる)とも、己に何をか損せん。若しそしりによつて、自ら強うせば、則ち反つて益す」

最後に、哲人、黒住宗忠の歌。

「立ち向かう 人の心は 鏡なり

おのが姿を 写してやみん」

結局のところ、古今東西、人間関係の極意は相手の一言一動をいかにプラス思考でとらえ、自分の成長に活かすかという知恵にかかっているようである。